

研究分野のキーワード：子どもの心の健康支援，対人葛藤場面の解決方法，投影法，  
異文化間比較研究

#### 研究紹介

私の専門は子どもの臨床心理学です。大学で教鞭を執る以前は、主に医療や教育の現場で、幼児期から青年期までの子どもとその家族の心理相談に携わってきました。大学院で心理学を学び、心理相談を始めた頃の関心は、不登校や発達障害などの問題を抱え、学校や家庭での生活に困難な思いをしている子どもたちの理解と支援でした。相談経験を通して、私は相談対象である子どもやその家族、さらには子どもが通う学校の先生方から多くのことを学ばせていただきました。中でも、子どもたちがよりよく生きるための支援において、子どもが抱える問題の大きさにかかわらず、担任の先生をはじめとする多くの先生方が積極的にかかわり、時には医療などの専門機関と相互に情報交換をしながら、親と一緒に温かく子どもを見守るなど、彼らの生活を支える周囲の大人の有機的な連携の重要性を強く感じました。そのような連携環境が整った時、子どもは周囲の大人たちに驚くほどの成長をみせてくれました。

さて、その後、私の関心は広がりを見せ、心に悩みや障害をもつ限られた子どもたちだけでなく、特別に目立った困難を抱えないごく一般の子どもを含めたすべての子どもたちの心の健康支援に関心を向けるようになりました。一見適応的に見える子どもたちの中に、学校不適応のリスクが潜在していることが明らかになってきたからです。現在の研究テーマは、“子どもの対人葛藤解決のあり方と心の健康”です。不登校やいじめなどの学校適応に関する問題は、子どもの学校生活における対人関係のあり方に依ることが多いのです。友達や先生への接し方は、一人ひとりみんな違います。相手と上手に接することができる子どももいれば、接することを好まない子ども、また上手く接しえずトラブルに発展する子どももいます。そこで、彼らの対人葛藤場面における心理的特徴を調べるために、子どもたちが学校で日常的に経験する仲間どうしの間で起こる葛藤解決場面での解決方法と、子どもたちの家族や友人、学校などに対する感じ方との関連性を調べる研究を進めています。その際、言語表現能力が十分でない子どもたちの心理的特徴の理解を促すために、質問紙調査の他、非言語的な媒介としての投影法、さらに子どもたちには特別な負担をかけない観察法など、多面的なアプローチによる検討を行っています。

この他、他大学の先生方と共同して、子どもに対する高福祉国家で有名なフィンランドと日本の小・中学生の学校環境と子どもの心の健康支援に関する異文化間比較研究も進めています。